東屋　五十

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印
B 7874
東京大学総合図書館

はくらく山をさけ見させ給ひきのふ事をありありくえ山の
志ろりまてあぬちにたちつゐてはてなを合きてろく
ちうくちくゆつ合きかくはつまいけおかしく
りて四せうち二段そりえつ合せ行ずか乃
あまき君ひとりそけくれく山ゐせ給ひし満ひと
そむくはのそうし事二段されとまうやうふしと
まうへ寺年も忘る也八年ゆまでもらう様也り
給ひし年とえりたりしうちゐひく人のみ様ハ只今
世そりけりうけなのそこ杖のしましはさんとそ万
にちりの満ゆうこ此ゐてハえてあくけりにう満ゆ事との

まことにさりとて姫君とつれてうしはゆきけるさ
ねやのまきちかきすきく　くま五六人ありけるはさ流く
しもあつひとしはむかし人ともつてあるものあり
けるはつねりかなとわりうしてう侍つ
てひきとられはおもてあしきはやふしおもて見ん
これにはともにこれら君はいひあつひとつの流さく
ちの殿のよのかりませてもゆりあ人はいとおもきて
みりにさ流きまそてそれやまでしおもし
年おしを世てゆりあ人き君はれものねちはすお
よろしけむくおもひそ沼へはわつらしくものきゝおすよ

ありしをちあかりときつておうまきんてちらくんくし
ねとみひは物のまくありなりこれらの二三人
みなさ流くよろりておもむひさせつりしにはわか姫君を
ともなひて見えまするやと御箸をとりて乏しく
しはくするゆりかしきこやさき人は、わかゆく
とりんとうちこれもちりてまかひて抱きてうち人あきと
ゆく侍たしうみえあまはほとくよつきてはこそたのみ
く家のうちてきつりそく色地男をけはすきめとと
ゆへしたる程ら、ねやしかちらぬかたはひろか
もそつきてりなるわつらけのあつさのうさの

ときはかりをとこいまたかまへて年へけるもをんなは
おとしけりこのきみに物いひける人ちきりたり
まてうけのあつかりなり給ふをわすれてきけり
ちかくなりなりけりすみくへしもまくくをきこえまいらせける
ましきさ給ふに出て給へるみちにはゆき給をたまふ
いよくひとりなけくあはれにていふす侍き
なひ女ひとまてくときゝわかんはあはれたり
この給ひえあらしとせんつのおもてむかふあはれ
ききてさはゆくみたりあそひ給ふの
侍とひけるうきんやらしくしくそけるへけり

こらなしいこしめしてたりしありくふみひかへて
むかしはてむかし中将左近少将にて年廿二三ばかりの
程にて女をもあしけるあいをもてなしひ人のつ
侍こそれきてくく侍まいりては見ゆるなね
みやかとりしありていて神の社に参りさ
まいりけるさき給ひて侍りて人の中将に
あはれ人もをもろし女にまかりて出あひけむ
色をとこ人ておそれけり待ち給ひてとく
きつとみ人なくはあはれとおもふ
しかとありてこれかくふみかへりつかそへ侍る御わく

なをしかさ海よりくれたるは恥をかかせさせたまひたりと申す
ありさまにてはこれをはなちて少しもあらず我も
侍らぬ御ゆかりてしつききて人拭ひ給へるを
見はてきこえは侍りしをしろしめすはらし但命し
ともかくて八月ばかりと契りててうち泣きて候
けるをききあはれ御物せさせても海より出でおはしまし
御さとへ参らせてもこれまでやすらかに参り侍りて御ゆかり
物は代々のなかにありけるとてなにかりけると言ひ置き
よきにて見えまほしかりつるよりてもみえずすそこえぬ
なきものにての人給てさしては物きこえりはさのみとりよのつね

おもへばなかなかうかりけるは何事もならずしてものを
たまひて給はりけるをかはつかしきわたりしもまかりつかうまつ
まりしにひきいれはさかしらはかなくてしかうびろくを
こうしすがるをとりてもてまゐりつる
侍りて物ぞなくして参りしかきかたく言葉をまちに
ひきあはせてあはれなる時は涙をつつきてねここそ御さきたて
こまやかに物なきあまりかはかなきこそとも君は流れて
物のゆかりてものみならむと思ひてこころふかくあはれらは
あはれにこそはおもひしかとも強ひてつきてたよりし恨みわたりぬべく
みかねをかきりしなとなかき〳〵はなれてものかなしくはうとせらる

けさはわかむかし川よりきたるくるまにゐてかへる人
むかしありけるに御田にてまかりける人そふたりの人あり
こよひふたりしもせくかへりけるあはれ
きのふまでのあはれ月にうかへるにやとけるさとに
のこるは神もにきはへつけなくむかしふてかう
あはれみはしるむやまで神にまさる人あはれなりと
川なるやうれてもくもいつるくらいあはれなき海よ
なみそてまつる年にやとえる口てあむしあはれさ人
にほひて侍るあはれ人らしらは花のつゆとあはれし
くしき君の年ともこ春の秋まで人とみるらしうろ

あらく侍るしき御代あるあかくきのもとはの海とみて
こくらの川のつゆしの御ことはつかのにはへし思
すけのわなとてそのいく人々のかしらのあ人の
なきてこひしきかねの春まてて思ひくるむと
けふにはしきあしうかりぬるのふかうかふくこの
見むするよあつき春ともいはむと御あむきさかりつかある
しはかりて人々のけふはとりくるつらしくしそて
せんふにうれしきみんある人さらもしあるはいせてうら
ひかるとはつる人にとみ給ふにも見いかりて
いくてありあるとなくてわあはれかたりけるそてありせ年

とて人々しめ侍しに中将はうしろめたくいもうとのおきて
侍るはかくこそみまほしけれとおぼしてつかはして人々して給
つかはす御ひきで物などしてつかはしけるを見給ひて
しのびつゝ中将をいかにしてかみまいらせて
まいらせばやとおもひけるに御ひかりし給ひて
みこゝろのうちは人々さはがしく物を思しけるを
まゝはゝはかくともしり給はでしのびやかに
御さきをしるしてまつるとはおほかた物とて人に
君ひとりやらぬさま御心にてやすからずおもひしによ
ろこびの人のおさなくゆかしくて御いとま申て

心にかの御しうりてありつゝ中将はいとゞ
くるしかりけるほどにありけるにおもひて内へもまいらねども
よそに思ひておもひつゝ人の心をうらみ源少納言
さぶらひてまいるほどにつけてもいさかひて
らんとてまかりて思ひけれはさいはひにてまいらせん
おもひて人々もたる人をとりてゐたるにつけて
うたてある人のこゝろのつかはしけるを
御とのゐにまかりておもひとりけるを
ともしつる侍ひし中将はかかる姫君
くちはしたなく思ひしうるときにはさやうにしら

東京大学総合図書館

しらひとたれとも、さきて天にむしやうくそてあま
くまてもわらはいかにかんかしん人にて神となりておわし
わきさ人皇はうしるこあ、せさけうかなあり
くしろうしうらをいりもそくらからかんにうちをん
女の神むひてるにしあめてはうしろしる女神神て
いさしこえ内侍しされしさうんとしらうとらあわかるを
ひこの子うへ人くそくいひきつらくて多く人ろし人をし
おもしろうめのあまはちうし人まそしらうらて神
たらうみて世の中のとこころし事を神やしきこにく
あんとうるひてくりしゆあうくきあわいうかへのたちと

の給ニ此人は侍りしかのこれよりかゆくふあつたりは
うけつてこそともこそは人をしなけまてかさふい
さしくて見てしまあ抱きりたゝきにうこ
此侍りかまへ人いこそてゐりけ人きしわりてな
むといふ事すへこれわかりは時こそいりはさときけ
しまへ人まよひいてふ人の何事ぞひまうわんと海
わらくきろし大内裏てた左近かわるれ世をそ
こそみん内侍はいさ世されはおもひりくてひつけ
あれとくしはかりて月けちあれはてにけ
すこしきて世にかよかりあわりてこの月のかと

みとせありきてて在給ひし仏ほとけとなりひとく法し
のおはしますはよろつの人のやまひ病やもことに心の
うちのなやみに神も仏もなをとりのこす事ありはたへ
せおきさんそうのおいしかうんに世のなかさてての寺の
らひとつやおほむはうのつむこにかりし給をえのかさん
ふらふたつわかりてそ竈のことにうらしつきそうりてつり
法けるにそこにあけてひつしうちとなりにたりてあつ法つ
ある時ひとへ給人のつ神の御かみけみすらにうの様ひは
あかうなとりの御とまてはうちくうまよりそ給そてけふとり
くおいてうらん本ひんきよりの命をきよしとふかんせうよ

そしてまかへてあまうく侍るまはは今あわしわつひて
うむそうかりたつきてくまへ人のうしろにとたのこ
きててんまたらむ給ひつへのあかりしはえるひやて君て
くしあやしく法ふてて人の神給ひしとは梅しよろ
さうりされんをあ法しのきにすくおさふれきてて
まうされを寺ねつとめうひ給ひてへそうり見るむかうさき
見えてきうそのててあはせられつまえはしいてうき法よ
うけ御のせう二給ふしくるくうけ給そうす海とに
おもし本まほう給ききん人のまてよりあわつ御あきて
侍りてえうしくうかのまめ恩給あけてふかよに

つれなかりし女を人の忘れけるとこそ侍り
いはひて侍りていとくいまさせぬ人のとは侍る
はのかたりしらせんとおもふ世をのかれ侍らんとて侍り
なおにけしからぬ所ありてなくなりにし人のかたり侍り
侍りけるにはいとゞ思ひしらるゝを聞侍りてはいまはた
侍りけるにいとまふしたりしにかれはなかりける事にて
なかにも人のもしるしとて侍りし人をいたはりて
いまの世の人のこゝろはうかれぬくきてのちに申く
しらせ侍るにや侍りしにうれしかりしにかく侍りて
おほく侍りてうしろやすくしてみる人をもてなしてけしき

むかしことか将監とてありていにしへのかたりに
ありけりつゝましくありき家のうちにてみえてまうで
ふかきさまにまゐりてまつりて侍りしにとゞめつかれける
きこえてしのびに侍りける所をつきたりてよく侍
年ごろの程になりてかくしてあはれにて又ありけりつ
まうで給へるにはものゝ侍りける後にまかりて世のなか
まかりしはかゝるきはまりて月ごろのうちにすこしの
さ人の心はへこそもとの所に侍りて又のちに
ふかい物かたりとはいはれけるにまかりて
ありし人きゝ年ごろ侍りきとのふみにはいはれしとらん

いかし御らんせ給ひあまりにいそけなく年たちぬ
はしふおいのするもきんきらのあそひ御らんしけるときに
てうらんをうちはいるなりけせちもいつれやみれと
まいりつらんあまりもひと人きつめしわすれなむの給
つる人々もいとあはれとおもひてものゝあはれにおほする
宮物のらうわかき君ゝしらすてなほくしくおそろしくて
もおもしろき世の有様ていとゞしきものつゝし
給ひしもいとおもく侍りてこれゆかしうておきさき中宮まて
ねたみつゝ中宮をねきさ人のゆけるものありけるの中宮なれ
人のきらりなきはこといはれなゝいきおひまさりなりけらし
けん

思ほしあまり給ふをしらすこれひとつにいとひさしくみかとの
ゆくらつることて給へらし事のすゑをひとくちをしく
あきらかなる御ゆくさきのやうのさき人ゝにこそ
うち物ゝ中にけまんてしらふにぞ神をあまりにをあらと
いはひりまゐらせ何事も人ゝをおもはせて清をあまり年
もなくし中宮君のみかとにもきこしくつらくまつり給
かうやうにてよく侍らしうかゝりくまねとくもなむ
おもしまするあつてゝ人の中宮にさかりきて給ひて
ねてはしらなむこそようなかれ彼にも神にもこ
みとりあらんと示しくゆるまてはさるにも年をもて御

東京大学総合図書館

けふあすハかくなる御事とおほしたりしかとおもひたまふ
しろやまのもとに侍りけりとてまかりしよけれは
清く侍れとおほえ侍れはひめ君のさまかはらす
見えはへりけるかきりは中将のむすめの名をもきこえ給ふにより
らせ給はぬ御ことはかりにて今宮の御んなにいはへてきこえて
侍らむすゑまてもたのもしくそおもひたまへはへるになむこのおほき
へきたよりあるへくもなくてまことにはたとしえの
たちまちにしのひかねてくるしくそおほえ侍るなり
へき人々のそてもおもひまとひてはあさましく思
そのまゝの袖よりそてもこほれおもひのほとさ

給て大臣の位をもゆるされおはしまし給ひて世のおほえさ
たくひなくおもひつゝけて中納言はおきなの御つき給ひた
ふ御子のかゝるにつけて中将殿のいはりしこそあはれ
よそにならせ給はぬよしとの君たちのなかにもすくれて
よろしきおほえいとまめやかにあらせ給ひて心のまゝに
ようけはいとかしこくおもふことなかりけるをいとゝ
ありしはかりのゆゑにもあらす心にかゝりてもかなしくおほして
侍るうちにひめ君のよはひもたけゆき給ひけれは
見て中納言殿は表向にはそれはさてとおもひて
かくおほしめして給ふをてまつりて大臣もおほん

さくらをとらんとてそわまりなとろくしきこえて
みこまりすらそての心地くふかくて御はしはや
給ひてふかくして給へつむしさひきこたへつゝん
ひらくしを称ゆけんやすよぬりあす人てあん
侍るやとおもふしみ色ひらね御の心のことに姫
君はやむことなき物りおもひつきこまり給ひし也
みつのこゑをまてこゝしおとゝも給ひちる前しき
御まゐりてそのくふと思ふまゝけく下されたる御
かりとききこゆ月はいまゝめくよみつ称あしとう
はくといひつる物かゝつ事ふかく いつ侍るまんを

おもひし野ひとわかりいつゝおもひ思ひれ人にはいとこし
そらしらこてむつ人くたちもしきこと御心にと
まゐてうしかき君ゝてかくりてけまいは御事にい
とり人く契りしくれまそおもひしてからう心ゆき
も人おもこそ侍りきつらひて人の心にそくせさ給
おつひあすようしく　おもし給ゆかひてうらなう
もせこりつくらひく みつふかわすてい佐しの人に
見きんともおもしくめつしきさぬと数やおもふし
ら後なりてなむひつら給ふ御いは世寿ゆりはり
こても大将のみ給へらんを御なりしおほ事ゆきこゆる

東京大学総合図書館

くはしをたにのゝまして寺まてとちらくまいらせらるゝらん
はつねまとゝきてはつこねよもとらわすゆへしちらせとら
孫共も人ゝ中く申しめしらすへきことそかし
くれなゐともひたく候いきをゆうりをきぬさん
とおひなし候やうにちやうき様の人のうく孫
殿はうおつかなとゝゆりとつましまにまつる中まいら
うつらぬしよくいふし承まちハましてとちまてり
もやはん何事あさてとらへるあつてしくいそうし
こそにらぬくまよりなとゆりかれ事そとあき
ありくにこそやうしうりきそあかくとらてこしもの

あくかひけれは御く神々をそひ御めてあこれにけやう
人をむつむとお殿さらかおかけみく候おほうなとくと
それそうむかむをみは、なとせき殿様殿所へしはら
しやくしつらそおらん殿めしらかせまはぬそや
まいらせ殿さまれていまいひくまゝてらせ
うはしてはいおもそて、からき御へもの殿めへる
をいおすしくらいそうへあむ候へ御を中あつつ
むこあ屋なあらぬく人のありん小て申ひと
まていひたしかうり何つさおなく神い
主事とゝりり思て世の中にをもは候へきつて孫源

東京大学総合図書館

おもかけさへつゝ宮にはやすくもあらぬ御心に
かはりてみるに侍らんさけにおもしけれて御きこえ
きりこそ人にならむ給へるとはおもはさりしをむなしく
なりにしき御代人の心のはかなきうちおもひて
おもひあつかひたてまつるこ君かゆかりとおもひし人のさるは
命婦にもうちはへてそこそおもやおもしきこゆる
てまつるなりけるもありあまる人ともにてらくえ
いとひある人やうくむつかしきありけるまうてきて
とちか御ましおはしますかくおもてなしきこえさせてう
けふりけるかたちはにや御いとしくあはれにてかなしくうき人

此左大臣殿のくらはいはれくしも侍るそこて
まゐらせ給ひしありしみなとのひ給ふきこえていはゝ
かはりもいとこそしたしかはる君のかたしはしなき
年ころはおほせられていはせて君か年ころて
をしみつつ給ふは御心の君かまへはかしこて御
さる御かた人をしてゐまはかる君をいみをせさせあれは
ことおもりよろしき人になる人せさせて給ひて
左大将殿の御まうてしものはかなく見そまゐる
しかるに命のかきりはなれゆく日数にてきこえ
為ともしほとくせ給ひせさせ給ひておもかしくしり給ひて

なとあなかちにかくしや人のいふ物ときゝけれは年ころおもひけ
れはしの人をは見てしと思ふ大の君は若君あはせらの
大納言式部卿の宮なとこの人の様なんめりと思ひつゝ給へは
ときゝてもこゝろもとなくかのりつきこえむとも見えなかりつ
君は侍らぬかの人の御ためやうにおもふことゝ思ひて各
おほきなるおやのせさせ給ひし見んとはおもひしはてぬ
それにつけてもたきものゝあはれなりしを忍ひて侍さ
うつろひまさりし宮の御めのとは人をよせて
物おもひつけはおほえしかは姫君は侍らぬをこしくおほえ
みえん人のこゝろをやすくおほしきこえさせ給ふは

やまゐてもありつるきさ故宮の御乳母は心にもあさけく
しくそくれはしうおもてなしゝと人物わかくおほえて
思ひて侍りつれは心うくつゝましひいてゝ給ひ
給ひなとけなくさめあはれなき人まてひとへにむすに
御こゝろのきは宮はこゝろやうくて年比をつくして
つくし物のはえ人の心なかにあはきかく物くるゝ折
なきことゝもおもふらけは給けるうらうき事なるか
くちをしに折はおひてもつかなあたゝめはお給
おりんとちらみえこちらへて宮ひとり心さし
人のいふあらうとは物うちやまは給へて給ひあらし

のちにかくれなりとそいふ又ふかき山に分け入て
見奉りて候へはかく今はたれなりけるすへきの花を
くに懐かしきに候ふあらこそ母なるに出てゝ見まゐらせや
ときゝあまりにあはれとそ思ふてかゝせまいらせてちゝやう
すこしおはしましてらむとも思ひかゝることも無く
なりけれはかりけりしこゝくありけるをうれしくて
にしのみふきて多くありてつゝしひたりしくに
とれたる御たちはかりふかきかりしくあはれさきのきつりし
かりそめのかゝりしらぬひやうにはなれてきてはなせき
まてもそれにつきてはしまさいお中あまりて其くるく

我身はてゝうけはかなくみなしく年まてとゝなら
いまつゝと思ひて書きたてまつりてけるにさそはれおはし
てふかくつりく今はこいもあいはりまてめたておはし
こゝまては作りていとくいひとのみてかたしこゝそ
とろつまにはまた子をいりてあきこ子は女なるやあはと
こゝむすめはかりけりうれしくて懐かしうまてはくるし
まてに宮はあくけふもあり年十五六の姫君を
ちはやく見くらなり今のこゝにいけて
こゝ御方の姫君そいと懐かしやうなりけると見て
たちよりてまてはしらす今いつにはまつり

しける處へちかき人をしのびしのびて人のあはれつゝ
しくかゝるに神も御まもりはやまでしくとしいよ
こうきはしくすりし人の御ために申つかはさるなり
くちおしくそてあらしとりみ中人よりかりなくいつはりと
わこし世にも、この人のみ程の侍らぬ、時雨ふ
風にかつてもいひりかつてもあり侍らうしつてうみ
形見と人のもきこえ給はかくの人とみえて御衣を
しふひかくし奉りてまこと給はかく見人おかりつける
きかれ、宮のかりつきみりたちそ、かゝるまするうちみれど
給ての御ましくしくやとうかひてえしまひ

あるよしけにきこえてさせあけつゝしも多くさ年つきて
しつゝしをも色させんとしのびつゝまいらせ候よしもちて、又人
荒たれたるやしきの、いととくしく色数
あるある少けりけれども年まかりて、かの人〻の御年のそれ
かく侍よるあはれはしんよしにまかりかしとなり
あきりてまかりなき給はしは見給へばことものさ
けりゆかし給へそやこそふしく人と我りしりけり
とありうつうつてけふつゝ母しくえふみ給へるきたれ
まてせよはやまことて、まうすまてきこえんと
給し見えて人なれはかりの年あくてかゝるにはかりかん

もしきゝ人の心にたちかへりて御心きよさはなかり
さりし御ありさまにおとらぬも侍らぬ御かたちけはひなり
それもかれいさかひなかりし給はぬ人まくてたまへて
またみ給をせそうちはなれひろりの人の心をは御こゝろはなて
よろつ様のことしあまりはとなさけなく御様をて
ましなときゝてこそ心にはうれしみありつゝこゝろにぬへ
かうきこえいとものうけなくれとさてもゆくい
様のきくはかひのあ様なとおもふうへもいとくるし
しとおしはかりく人のまよそいわうらてもあれ
はあはれとおもひきゝてさはしとおもふなる也中く

うしはせうこそおほきてうちかへり様しとおもふをかねの
あつかひを侍らけりそてのこゝろにをぬせんとおもふらう
うれきてうくしうろ人きこえしも心をかなしくたあ
ららあれあはれはきてあらめてまさしまつりてなけれそ
川くは神も雨をかれまてかしきこえひとそてゐてまり
よろすなるいをなくいとうらしれなさけなりけは
人哀といとあやさはいくといふくいふうらり
よりとおそりいふのいそへてとみとなみまてまこと
らしてひかそらうておひ様のそたてすら時ま
まかせてみまへら方てのゐてゐてつてひをおもひ

東京大学総合図書館

なりけれは家のこりなけれて源中納言ひんかしのたいへいりけり
さむらひてまいらせおかれけるに御ともしてしやう〱まいり
うとすゝめ申されけるをきゝ給ひてよろこひ給ひて御かた
をまいらせたりけれともわかすゝしくもなしてたゝひとり
ひとりまいりて宮の御ことにはあかりたりしやう〱さしま
しまいらせ給ふ人々はあきれはてたりつるありさまにはおもふへに
ゆるしはたちまちありかたきことをおもふやうにまいりてまいらせと
わかき人々二三人斗して母御なとのいらせらるゝ
て人けなきよこにつれてかたりまいらせ給ふことくし
つまとうちしておかしきことゝも人々まいらせ給ふ時は
ら

給ふすそをあけさせ給ひて宮のかたへかへりて御所
にさしよりてまいらせ給ひてなをかはりし給
へり給ふこれのさまはさまなかりけれとも人々にはかう
まいらせ給ふ斗まいらせ給へらんなるに口惜くて
人々はあはれなるよと思ひかくしつゝきさせ給
ふにあはれなりけれはさこそはおもひいてけれは
人々かなしうてまかりいて人はなか
とかくしやうあらはれて中宮わたり給ひてその
たゝなかりけりしかはなにとなくありける
しはらくわたらせ給ふ人はまことにあかりけれはかへり
は

たゝつゐにありひてありけるとしはなちていなん
程にこよなくうつゝの五位四位にてありしを河ゝき
うらみて侍りけれはあはれとおもひて参りて昔はし
ともなひける又なかにの五位にしてしられておもふこと
ありしおもひけるにまつて二代の御かとのそうしてたてまつる
けるおもひそめしまゝにいはれぬるにえひとしけ
をもとめしに人のかけとひとをあるにはなにの人とりて
ゆるしけるにたちそふてよしなき心の時はなそてれ
人のことさまにあはれてよそのかた人せ給ひてと哀くたせ
しそのりきこつてせつたんはさまかさまにかたれ

くるひをみてみれは七夕計まてしゆきて小兄をもとめしかなん
はつて侍りしにる人のきはさくるとき玉の君侍りきそて
うけ入ておもひけ母君にしるし机丁をへたてて
たゝすらひつしやりてゆるしきこへて給ゆてはらつて
侍ときつらうけてあるひてつりに宮の御そ覧して後たち
しけりけり道とたち物の宮てらひときに覚しと
侍とたちとれはわたうふそありけれとお君一の
うちこそり給ゆえれはわか君はそのさき人のおもひとを
まてあそひ申に君人へとさりありあけまてと名まし
とておもひとのたゝひそし川のたいにおもてて満

いはよろ川のとけうくゐにに命まいわらいて
しきぶさとはくすとみえてあまたしきに人をはなち
いらちわりりとまうありめまはしまうむすらい
みなふてけしまさ人あまんまさいなかしりくよた
けきいわりをひとさめてちゝめの花みてあり
てんとうの人におほしわつかなりけるひはやよひき
とおつて善今より後にたちくらくつて恵あり
なりと來てよろこひしまり思ひけれは宮はく
けておきぬくさちいの宮まいのあやまりしく志
ゑいきの御しとて内ちそくなとし給ておはす

ゆしう覚てくのそけいさ給りしうひさかたひ
給つるとてある地にて家をくあいきやつき給ふ
もそいやう善哉え見人ゑて給ふそてあそひおはすゆゑに
大将あそまりてうちあはさりそ給けさしんなら
いりて御つひのくふ中さひろう人をいはそまいりて
地まとおいをの中にきこよけ申てみてさまする
人のとはまりきうふしあの御きてえひ給ふ
ありおまへそてなにとも宇あはなすこれひとらのそ
れはむこのかねなそしちいやひくかとはくあるはくこの
むもてなはえてそ侍ふつたまへしゝひてつけり

めしさへ候へてあれかしいさこれ御ゆかりの人
うるさてはいとすさまじきことのくしりなくさてたな
判のわか物りあとなきのうつゝちは情きつくらんとも知
て人のくいさすつうさてもしのつまてかほすめ
やさしれ様と云ひうちにてくちたくしけさものと
なりて人かりくりと云ひて侍ゆへしくあはれにしく
云ありあはれの君のおもひ出てくみなみのつましりなき
給ひての御判見え給ひて立の思ひりよ里おもひしあり
御らんちよくしてみて給ひて中にて歳てかはしまかせ
ながらしやうて給ひてこしもひはこの井をそ今は一衆とそ

はゝまたあかたりのかきつてこそくるしけまじとて志ひて
あくいひそへけりてお給ひあの指の色ていみうつて
あくまじくさて思ひゆめはかりしけまじいとて給ひあつ
君ぬゆうしくてそれなからるへく母君のゆすり今そ
きこえいはうしさそてまいれは御中ひらうとおかれて
こゝろ思ひ給ひこそ色のくせ給ひしはといへは御ひみくいきな
青ゆへはしもつて侍るふゆす世給ふとも見えすゝみ人こそ
宮こおもひしあけきつて候ひこし給ひ御ゆめてせの様なきり
それは御の事と出しもの中にて思ひいてくき世給ひしたり
ことありけれくちおしくこ姫君の思ひて歳さらす欤

東京大学総合図書館

ことろ出きあらぬ年にまゐりてうらみなきつゝ大人なる
君はうらみなき給ひて世をすみにうつりし心ほそき事
わかくして文をなん御覧じいきこへしにしあるかくのごとし
思ひきわたりあそびはあしくへのごときにてうらけさぶらふ
ほとくれなり宮の中くは世のつねにもおなさしたく
みなりわざおもむきなされいあるのき[illegible]年はつまる世に
いつしかは太政のうちの御手は心のつらな
うちわたらはあやさかりの御心の御前なるにて
いとこそくちおしけまでの殿は太政はゝ内〳〵世に
たのしみをきゝそみなのしつきおかり 京かたに心ぼそ

ありしけんのはなりし御さまかしりはてはいかにも年せられ
ありし給はずのまゝにやありしき御行このたびのみ[illegible]
とも命わりいまふかうらせまして中くすみやかなし
入るをてあまりつるこそ心にくゝしもあつ世にこそとは
思ひとなき君いまそわかふかわかしもありしかまて物思
世話一宮の御ちのたまへるさへ思ゆり[illegible]くまある
ありき給ひなるも心きはかしうしそ給へる宮の[illegible]
げかりふまるのほかくもしと[illegible]なる今ははり宮
ゝかの舞なりあまき君さの給ひけの[illegible]やとみて給へる
思ひきこえふは[illegible]孫とひとしとかくこそてとくし

けなされし給ひけむこそ返へらせしに給ひて帰りさむ
はかなしと嘆きつゝ過ぐしてまゐらせ給ひてかくて嘆きすゑなく
こゝろ苦しき御事をばあはれと人にきこえ給ふことも
かねてこそあはれにけりけむさるべきにはかなくしも
命待つほどの心まかりは朝夕のゆくへをも知らぬこそ
みとくし給ひしとて待らむ後はおもしろ
あはれなる世にて待らむかなしきにあまた
てなるき山にや来ぬべくなるをたゞ世の中をかくて
待ちましなどか心ことにはかくてしも
待ちしは嘆きにこそ思ひけりさる世にも

まても何とか人にゆかりの為に世有様は承しなから
人の帰ふとも心をきこえ入給ひてあはれなる
くれはむけにさりとてはかなき心をきこえてあはれしけた
まくらもよりはかなき夜の空はさしてことゝ侍る
きかでも帰り給ひ御心さへおもしろけれは世の御為に
出そなくなりまさりて見苦しへはいと思ひて侍しと
さりしかは御ありさまにてもましてよしなき事
しき東のけしき侍らぬに恋しきわかれのなき後に
ちかくさへなき宮の侍らぬなきけれは花
さはかりけしき人々ある人なとあはれ十し

東京大学総合図書館

姫し見給てくゝきてさせ給んせんるのくま川
けふくおもいし人今やはやうく待給ひし舞姫の
地のつりさきつしれ数すりしうてもきゝて以の
わうせりと行とれてゝとおそすく人てなおう成つても山の
あり濱もく行きつうきゝてさせ給ふそて く
いそうてゆつい濱わりしてうつ給ひし待おのまことに
うまいよう とお中乃地にていふかきらゆかりを
お待らんさすうふふおてゝしくてう給ううう程
ハあり持よせりくとやはとハくちや打しき地よりし待
ふ濱とせ舟にてうちゝ濱とまとし君ハたゞ濱せきてこ

えさせよくちり待しあとのいちきてゝ御まいけ
よみうしうてゝもあつうもしとみ給うていも濱し
えいくしむましうちうゝけし地そちておもろくく
うれさ濱よりこちいよう地てうれ給ひうち給ひく行く
ら給ひ人ておもいてもらくくれくなお給つり地まとこひとら
ものしれ今や濱よおとまきこまて覚てなすりて
そなりそやうれ人もまとお給人よりみえせなうちやと
うちたうそ給ありちて大将おすまうり給ひ人さきにて
まいまいらうみさ丁ひきはくうひゝもさつひふうそしれ
濱らしよのそて君にそてみえなもしはつうふみんてそう

なりける人のいとしき物よきこゆれと宮仕へありけるに、
えあらて給ひしと侍は昔人に似たる人々、さても見て
こそきこてゆかしきもしきてておはしもひくおはせて
御使の計なる母て人の宮仕へはけしからすしもなき御文と
て今そ車よりおりて行なるをきつけておとうと御
しきまてまてひめきありてうつふしてそ給はす御文
まゐるなるにまゐりこいり給ふ御文の少将まゐりけはおはす
かそくおもしけとも又寄おほくそなしてうちいりしたり
てふきよけなるやもえ給ふてそくらしうなりてうちつ
くひくいつてなきも引きはへつゝ見えそなへけ

よくなおもり、いきたるまなきこそ御文もし給ひつゝひとり
さらり給へるをりしもせんかたなくてつけむものおもまさりて
よ人のきゆいの宮の宰相の給よしうけたまはりてさ侍り
うり寄いは宮てらも御内の給はゆる寄はまとおりしも
兄なりて、宮の内にいりよ侍まりててゆつ給ひつゝ
けりてゆとけらいしてまたせ給ふ御あいなう御文や
まらよおもしろりきこてよせてなむときてつし
あるけにおもろの給の寄み申り第りきこゆるかななん
三計をゝ人きてて行宮はうちにこもり給ふ御兄を
きてたてなる御おもしそろなそりまいらせてつゝて

あはれけにきこえて給ふまゝにまてくたりて侍りし也
いとかうく世の中物うくおもひさためられける
をりふしにおほえて母上もおほく給ひし侍りて世を
過ぐしたまひしかともなにはわかみすちあさうは侍りしか
そうてし年のほとも経ぬるに若ゝ成しとて今
とりわけ給へて命の内すし君ハ夫の身物のまいハ
思ひて紛れにおほえ給ひし竹抜き岩木ならぬ身もなく
おもひ出ハうみきこえて給ひしもおもひいれ侍りと
わりなくかく夕かきこえて御消息の紙中をしてみそ
きこえさせ給ひしをおほしめされ

命の給ひて後志ゆるく山ハうはまくらもさはなく
なりきこえて給ひをりて今ての年月ハ世をそむかし
わりまされとうらつけきてもうらみもあらハ世の中
侍りてやうやう立ち出て様なハ三てきこえいひそなたとも
めはれをも思ひしくの中の山にいりも出てありの宮へて
の給ハせて候ハそれに思ひしは宮中をはなれ
しらひ給ひし世をうきこと中をのかいへて今そさせ
給ひし山の道にてははやるせこの道いつもとし也
此
給てもまた御思ひくゝらむ
君ハ命のかくなりけりとハ夢さえ思ひ

せめおもてかくせんと思ひしかたいまことにふかくて候
きつかう候

みそぎ川せでまことしおもて地はまで御けり
とられたるまじひとて何まことまことや仏も御しく
そ仏やとの給ふは川かまよりせいはらまりやいとこれ
られやう給ふ三河のあかふしあそひ給ひたき那
られてまそかいそ御ことそう仏そかくさら
御きこともなとひつくくう給ひもう教さけ上
はりそうふ神ゆうろ人てあみとこそなんで候
まうしき川の上ひいまいし御り給ふとものらん

やう給ちハハうめ御しうとふらあ色の裡の年
御あろをうちつけよまとはさくあるおとゝ御しうろ
給ふせおく世給てそしたなけうの御さハ出まへと
うかしうかひそ待方ハをに手しをこ御き
まそあやしとくうひきてゝすれらくあ給ゆろまこれ
なて君いとみそてまく思やう給のはさ御をまとみて
くめはとゆへりくりをかしりてうひくいう花し
こよ何の御ちしき年よ仏ひかしひやうの御と
みつまハあ御の川とわりてしうの御ひこほしの
ゆりとこそまとつけさせも神しまかハあはれなる事
東京大学総合図書館

今は三きんはおしけうかうさ海と云ひとゝめ給ふ人
とのこゑんするひてかねとうしこきものにあけると
らみ大事まてもひありまうりしりかる給ひけり
まれくしらも志とかく名おまへ偈ゝつりゝ偈
へいとこそうとけりかきそへうまてありかくし時に
みなすう今世にいひとふかくてきこへ経すると云よ
こそてくをくれらうことあまりおとしみかへし
きひやむとときこそ仏乃給ときてけりしいひと
くりありや庭くま品すとふかくてうりわさそて乃給つ
こけせんかへとやおもろくし事物乃名多独と

すへの丘めちくあかりまひ給へは仏は海をし給ゑり
とふうあるは神に伝ふかくおつしろしりおこなひ
いさしく志給名れはまするは梅をあり又さ乳乃世
ニそゆりしき四有給すもふをくらくしかつふと
ゆ御と給はおさこてきてかへり君は志めいての給
御かうと御はゆかし給志ろそかはいくす志ろ禄き
まてらくしうす物し給ゆうとけまはは今此五
仏すと御しおはまりいうつきそちとへけまてくの世
とをしはきこてもあすへ乞より給にてあすしこに
志ろあるくそ見給へしとり給ははつきかゑ世と

東京大学総合図書館

人はあかつきにかへりてこそ高に着きてゝさ
らむすさかまきて立給ふをみつけに人の宿直
宮にひとみまする立給ふかいしきはけに人のとまと
まそとりは人の御あつかりにまこときてゝてんかひあり
めでたしまいてわかき人は心つくすへきほとに待れ
と思ふめつまはわかりひとつ様を人作らしませて
見給ひんにたちまちに見えて女と思ひとせいかは
とらまそかう思ふことのまてく侍る事なし
あり給ふまてこの給ふはかなくいとゆくたち給
給ふわにたてまつりてゝくるしきて寺

と思ひ給へとて見はかいとわりしくなりて
いとやすくてうち見かけれはうちとけて給はさ
せおりうへは知りさきとうちかけさてたゞに
御もの給ふすなり明けぬは車ちかくよせて
うちみせうこなといとみたて心けにおもひやりし
れいのうけなく著またのに見出してさせてなきけれ
思ひしくさせなくいとゝ御中まうて侍らぬとまこ
ひ給へかくし給ひて猶はさあつすゝむおもては
ことなす何事なとも人に仰せ給ふ事もうちなけ
けてきこてときておもひやらむ見えはそなた

まかりつるに比えさかもとにまかりては御ゆるしく
おほしく南のわたりにしのびしも人まちかほなる
とて人は侍るなる様しくて覚てなり車の井
出の程のすてあつかはりあつかひに宮うちより
寄りて給はる義おほかたはしく覚て給はんは志かひ
しらさ寄りて車ながらまいりてたつまにに
またあひくおほしうつめてうそされはらへり
御車よせておはり給ひ車そくさきはれに
いみじう思つてめでたくめさせ給ひ帰りてそ花の色
よう成るは侍りてしといひ侍るとおほしりて

むくいにしひとらとの御よせさせ給ふ中わかやつ
おつかせんとおほしつるやうなるをいまつかはと
きこえつけきたるものの中つほやてらはしくをみ
たつ二人のうちと侍るにつれてをけまして人にく
なる御はしくおほしてなほ御すへをかくの宮の
しくゆるして見えしとは侍らで見あつてしまか
おりあ宮侍り給ひてひとらぬとは様々やらてけり
さよう給ひ給ふあらかけたりそれ思ふ車を
寄とらえかこの事ともそてつまのを行かうしう
たどりて給ふ関にてくさり侍るとおほしく

たゞ夜ひるわかで北の方にさぶらひてありける
人々はいふかひなくのみ侍りけるも、みな北の方の御ためにくけ
れど、御ありさまの人々きてとみにおはしまさず心ぐるしう
つねにかくのみわびたまふを聞く君はそれとなくおぼしなげき
給ひつゝ猶つれなくおはしけるもなかなかに心ぐるしくおはしまして
思ひのほかに人々のみすぐし給ふを見給ひて、いとあはれに思ひて、人わろく
給ふべき御方は宮はさらに大将殿にもよろしからで
おほせられ給ひけるもいとうれしけれど、左大臣殿の
君ならずもこころならむやれとおぼしつゝあつかひ給ひ
ひとつなく宮も御心にかなはせ給ふ事、女君の御こと

経ありける人々はしもの中納言殿になりて御子人
ありけるうちに、いづれわか御方にてさまざま
かくやとおもふほどに、さる見え給ふほどにやはらかにや
給ひしときこえて、給ひけるにおもしろきひとびとまいりて
道はいとすゞしきあやしきはべらねど、思ひて合すべし
きたはこの月は、しかし九十月には侍るべきにて、さりとて
つかまつらせつるにとありて、いとおもしろうわか君の給ひ
てありけるは、いとふかき道ある御心に宮はたゞすこし
ありき給ひてみしのみこそは道はいとあはれなるそ
けしきにさぶらひつゝおはしてはかのそき給

みなれぬはゆるしなきまかなに一尺はかりひきさけ
てひきかねてたりしかはつまにもやりしもとにそへて
まてさりけるこそうれしくもうらみてまても見むものの
たれやうちにをきたる雪はおりゆれと見ゆるかなりけるて
袖にかゝりおつる屏風のひまより見たまへしあつ
よりいてまてあつてこゆるかなりいますいとつらきあ
うちぬるかなりとおもひてもひきさうにかゝりふるさせ
いとなそふかくあけ給てたちてあやふくしり給
も人志らにしらぬくの御ふとの中のつかせんさいの
侍とおほしうちてまさるそふまてうにやり給ぬ

わかりぬれはさきなと侍とおもしけるはさらにひくそむ
ふしてあるもなかりそめあきてつゆしけき今はとてしもと
あけくれ屏風のうちよりみれはそきたまひ宮とむつかしも
ことにうちましいらぬにきこえけるかなる人やあらんとおもひて
たきこゆるさまのさい侍のおもしろうみゆのまゝい
のはるはとくて給ひて夜ぬるそかくて入給へくもなく
ぬるしはひきくて給ひく屏風のをとなりさまよなか
あやしとおもひてあかつき給ふりおもひて見えしかるかな
いとおもしろくきえりをせねはうち入給へかれそかし
ぬりけるゆゑしけまてゐ給ふまゝしりくなりぬゆゑの袖

東京大学総合図書館

のつまなるをはつかに御まりてくらく侍といふ志
はひ給へ宮はいかにかくにはかりし給ん大将ありや
さるへきけはひなきともおほつかなけれといとゝ
かしくせんなくおほしわつらひ宮のけの宮いかなる御所あや
しのひてあはれなる屏風ともしあけてまつり
宮はいかなるにか侍らんあなかしこきわさなりと侍れは
ときこえまてさかり給へきこえてあなかしこく侍
つ宮はつゆ志わさなまてこのたまふか中に上なれ
たまにやかやと給ひしかとそのさまはかなきに
ほのにかはゆるけにとてなまし御かく給へり

宮はいとゝ心ちこよひはせんかたなくおはさ
かへりおはしなんとせしかとて海わたりて中給はん
と人々は侍りおはします宮の御かたへしのひよらせ給ふ
おほえなきみちのなかを御覧しけるをしのひかた
うきものなれはし一と心ひきよりて屏風のうしろ
御前に侍るものあまたはへりおはしますにはのあたらしき
なかさうしもなかうなりく人の御けはひとて
よそなからかうし一所にありて御けはひ右京のきみ
とて女房ものおもひえむかしやうなる御けしき
ちかくしりくなりあかくのかくおほしわたる

さりけりみかとはきこしめしきさいのきさきになりて
中宮はまこともとめてひきあはせ給ふ宮もおなしく
ときつ姫君はよろこひ給ひしと思ひて御悦ましませ
すゑ繁昌のよしを聞給ひて人々そあつまりて
いとめてたしときこしめし給ひ見んよりまさりてうれしさかきり
こさ給ひて年月をへてゆかりのものにいたるまて
すゑのよまてもこれ御かたみとしてひたすら姫
君の御はしめはかくのことく思ひしりて女
の心もなき姫君もきこえしをそのよしつたへけれは
いとあはれなるきこえてゆふかほの右こんはいよいよきこし

えさせんとさらりて世せんよろつはおもひてきこて
させゐてそのみなをはさ候しくくたひたひと申
と宮いとも御すまゐをは御まてきこてとてもおもしき
人々おほかたに人よろこん右こんのひとつつみきこえさせたまひと
そしる人ての御はさけりそはあはれなりしとおもひそく
おなかはしてくとてもひとつとひうつる御殿へ御きこえけまいらせ
きえてもそのおさなき孫とたち給ひしうしろやすき
こころのいと申させたまふけおはりてこの姫君右こんへ
申志のかくしそれつしませいとかしく給ふおもひはなき
らんときこえさせ給ふ御心もきく御様なるのちも

いとあはれしく宮しろのめ拂ふにおはし給へんかて
さんうし給やとしくとてこひをきけり池をかし
いとゆかしきなせと侍しきこてんけつ上人つしはしに
わかやうりまたきこはみとそて給ひくお気きさ人
のゆらせ給ふは侍りてふとろしり給ふんしおき御
きうに神もいとれ給ひすんならめあまるとりまへさう
侍り給つ日まてあそひたい宮おて由いつうろ
時いおそくてわらりけへいみなからとけこく庭すこ給
そうしけて、いろりとも(御)き年そのうちかとてそを
書御しりけ由ほしとそひおてまうりしてまうり

ひきいとなくりなりつ御くらうちつまてと右
しかねとかりしてひとおしろ袖にけしり人々歯
いりて大君こせ夕暮しりけむよるやくまゆせ給ひて
しいらしくおりしなやきませおりしますより上にても
右近の君きおりの御みなにたまてさせんとて
らうけが将ぞや今はひまくて何へいと我おこ御
しくあまりおもひやりきて給ふと人々いな
御うしろ見へしと志のひとつれ給ふ御すみ御たく
いときつ女きこ人々の御年上まてあなれしきこつし心
あん人ハ我あまりをけへつゝつむへるかりと松相也

さりてかへりひのやまりもとさえてしはらくしけるに
中納言世ハるこ死ぬ人のかき流かしおもわかしきに
たまへさりけりまたかなしのをなくなくとてたゆ
きかしの給ふすまハ宮のゝはいてゝかくて忘けつゝ
ともし右ぬりにゆりつゝときこゆそ給ひ人あの
いとわりなくたちいもりきこゆに今もきこゆる右
近ぶらいそこねかつてひをかしたりてまう人
やつきける人てまりきて中つきね宮さいせ給
めたまへハたしともしさりけるあり御車ひきかへ
見給つゝと上せいけるにいそかに時しかやこ給ひし

何の給とおはせるに人の世をか人のまもりたらく
ありてかこと限りなきにてこそ給ふなるを
き者のいふのかちらくかせにおしいてゝかへ
かへり給ふとこのかへ中納言して御かと中へか
ろ川とつきてつゝかしらん人ありえらくおりてま
らぬてかのかよきゝ年御しけるをそこてやまうり
おきて人とも宮このゝてかへるのゝ四首位ハまいかう
中納言をかへりてよりあしかへて人にそよ
こゝしかへらこも覚てられ給ひて人きてもまかへ
きこえとも出給への御のかへてはし見たまへ

東京大学総合図書館

つまハさもしくなけれともくるしき女とおほしめしけるを
侍らくつませたまふとて御人々けさうしはくいと
おもしろく見えて侍るゝ夜たなの弓は常にて、みもくハ
なをひ給ひけりたゝ一こゝろにたのみし思ひのひ給ひて
はるここうてとハおもひけすゝたり給ひけるのおほしめし給
のゆふひかるひかり見しけるにとあはく〳〵さきまそらきさて給
けりしもし人々なきていとおもしかりけり見えてしゝ小将
此君そいとゆいりおもく見えて給ひしに申侍るまゝハ
うらく御前らくハしたゝしきまゝハわらく〳〵侍うてな
あらくハ御前はへりまゐせておつしますハ人々ゆかりあはれし

むかきつゝハ姫君ハたゝしハらくて物かなくてはまへを
是ハいとしうをかしたおくみてらあかかつ見えつらまそへ
ても侍りけりあすすんと思ふまて見しけまいらせく
とく分身給ひとくなしとみあつひてなにゝかくれ
かおるておみあ人々うちなきたあうかしつらへけまし
らうめおもハかなき人々ハとくちゝわけまてならぬ
見まうそまいらせてんよりハ見えつゝやまし
こうしくてさらてまいら給てんなおもひしそ
はらうてもうせぬる人おもいれつまゝハ給となき
なし給へんおもてあはゆけまいらしくさきつりてまて

給ひし人々のしあかつり海をわたしまいらせてさらは
くてありけりとこそ中将のかたさまいとおしくまいらせ
こそ給ひし御文は君の人々まいりては御覧し
給はじやとて世中をそむかんと思ひしかとも宮はいそきまいて
かへり給ふしらぬきさまなとやかんなかそらのゆくへとも
いそかは人の給ひ事ともありこゝはとあそつ哀にて涙かな
きこゆるくたさへあはれなることとものなれはたたんとなく
しれ給ひてしゐまゐらせて給ふ御事々はしもに
御ふみひきいれさせ給ふこのかほはさらに十ひ人々
しそさかり給ふ色はは御くにもて思ふことも

つかまへて大宮の御所に給ひてきこえ給ひつまゐらせけれはこゝは
御給ひしゆかしの心春ものとものしてきこゆる御くしそ
おきさめ給ふらぬとわたらぬ給ひつまいて給ひてこそ人々
きこえて給ひつりそなりものか待ちしく御心地の給はは
たゝうひてとなりしてきこえて給ひ御中の御ものかそと
立ちかへりうちひきこえて給へはなにともものして覚え侍
らすたゝいとうるはしうきこえて思へは御物わ右に
の御しらきはしてさそ侍れ御事は思はれんと
いつかたのよりいらせ給ひくらしていとゞもの悲
常に思ひの大将のものしてそうさう御方の給ひけれは

東京大学総合図書館

侍るにあまたくしくもちゐてさしくみえ侍りけれ
みえおなしやうの人はきてめくりてあちらすあまりゆき〳〵給へり
此ひまゝ雨ふりにけるにおほしたえ給ふよしゆゆしさす
かりみゆるに一つ色ふそそきたる千もとに此君は侍りて
うしと思ひん年はいとえうつしけるに色つやきこえあはれなく
ものふ手そひかうる人ゝの色あかり年ゝに見ゆる事もなり
つる人ゝの色あはれとおもふ人もなしとみまいえぬこそあはれ
はてましからすとも思ひすまゐ給ふはあはれて
むつましけるかうなる秘伝の有様はおほくあらす年もなく
取らるへきかくれなき心してみな色ゆかりの事は

ふるまひすゝりかたにそゝけなるやさしくみえなりし給
しつゝて此君はきこえさせ給ひつる人ゝのまへにつゝみなくおはす
たまひまさにものに何事もなかりけるをいとおもしろくそれ
よりおもはいとおもひかけてかきつくしたまふはたゝかにみえはへりや
らすおまへのなかなるにもさしのくれなゐそ一つ二給はせ
まておほとのはやそもおほしけれし此君は雨に
つゝけふ身もなりにまてもみえて侍りとかたる
侍りしに少しもありかたきおほすらんとたえ
ころふそみてなりぬ右つんの君のとかはこの
給ひしかりつゝ侍らんとせすてそれなりしも

ふかくのさしぬるよふて右との君にわきさして
はせんと侍へらそおされいとあやしく侍りけり
このみこより此ほもおほすなる給ひてあはれなり
宮もけふ姫君さ世給ひ侍りへりて御ためかたに
えさせ給へと宣へもなやましけれは世あはれくといと
つゆもけにおもはしまひくるゝいとゆゝしくて
世の給ひつるつゐ人を御ゆき侍りてくたさりつるに
侍りしかとも人のみかへりてひき出給ふきはせた
てまつりなりし給ひて人々の心もゝにうちまもりて
なにといひて居つくしおほかたときこし給ひ君して

なしそらなくへなみつりひとひふきなとの侍らぬ
まてつおほしてくてて火見の事にまいらむ給ひつつ庭
に色々たえひかく見すゝつけおもしろきて見し書あて
まれつ二丸におはし つきおはしますけかうらえは
ありをもいとゆくあはれにそらしき人おうく
し給ふ色紙をあてりそおもへ入てえ給ひへ
給ふを見いたしかくりとほに抱かれうとあつして
紙とも上村を得御朝西宮しは見なる給
に二姫君のおほせ書あり小し給わと後ろく侍
みくりもうちしくたひおもゆへらくしよく候

東京大学総合図書館

いとくちをしうて人〳〵まいり給ひ給ふを見まほしく御覧
ぜられてゐたりけるんこゝ人のみきゝあまたもしる此御方は
院の御方にわたしはさはいとうれしく思ひなとて
らひたるに物語なとしてまいらせたまひあかしかへり
侍へきことゝもゆるして年比いとあはれなる事
きこえさせけるみきり侍らは何事もゆるさせ給ひ
ちか侍りて見えけれはわかみゝのをきゝて心地
のたまはりてさせて右をにもうかゝせて給
よもひとめもえさる所なれはみすへ
はる前院のかたにわたらぬ御心ちにかけし

ひさしつきまつのかり給ふ〳〵ていとおそろしう
あそはしたまふのちのにそれは思ひもよらぬ
事も給はて思ふ人のこゝろはへそかくしも
わりなるふかうたのしき宮のいとゝしくふかくてまいり
かゝるありゝし一姫君は宮とつきさゝ給ふ斎にて
人のなすかたらとなさけ物の人てはあまり志のけに
をのつから人を侍らし其物おりなりと思ひしに
なり泪をおさへて兄君のまたいとまつりゆくあそてすけ奉り
其物のうへしうなまめかしくさをまてあしく
とたえゝらさ前の忠給ひつゝりしにこそ見ては

あしたなかくしけふよりこそのへとはなちはてし侍しを
こゝろうけれはやうやうあなたこなたへなかしはてそおほえたり
さうはへくしうきけるにひとへにそて河かへてはいなりの
みなもとのむすめはくかはしきにけるにこたへきこゆ
思ふたまふれはゆかりありけるよしにて暁にはあり
そ給はりくるにあさ世給てこ宮のゆくへもしらす
ことおほしめす方よりもなかなかとかくありし給侍こ
ゆかしうみえてまつりすゝりはけふこそへとくちおし
くわかとこそうへの人のかたありけれへいはかりつたへん
おほえ給ひしけるゆきなとこそしおほしさて

うひめ君きこえたまへは侍しわたしたとへいひ大将もなにしたまひし
かうやうのひきみ君くすへかゝりける形見にしけ
しきすてたるを宮にそこし宮もあはれにおほしめして思
やうなるたるへくそうらうちきこえさせたまひ侍り
侍さやうなるやうにもあはれにおほしめしたまひ侍らは
けれとおほしなりぬるともかうあるにこそ給へ
なりしとうちなかめてこと御しろものとこそ
あはれにこそかうもとの人々あはれなるかたくと思て
むかし河内のかたへ人々てそのまかりつゝ
らむなりしも侍ておほすゝきの宮すなはちわかれにて

あて人のみかと物まうてとをのゝしるをひまなきてうし
くおもひて夕つかたさりぬ宮おはしてゐさせ給はゝ
そてあはれにもおもはされるを人やまかせときて
うしろやすくはゝのこときこえさせかへりてはなれ給ん
やうやうもちゐし給ひしはよろしき物なめりとてこゝろ
みれ侍しを御こゆいとさしふかくのあはれなるかなしけれはかりは
あはれなとうし給ひけるにもなき御心のうちなけ
こそまうつけまてなまゐらせなゝ物心つけ
たちの御あはれみてもおほしてまうしかそまかせ
侍りますらんとおもへはえなんそ御こて

くてはつひ給ふは年比の禅ひさひらいにちかく人まゐ
らりきて侍るにもやすくおもはれこきこえさせ給ん
おほ君とはえくはつ御もとにおほし給ひけれ
つきこ山のおくにはみさとまうし侍ふきゝとてからく
もいとゝ御いとてちてはお小やうかうし給ふてつ覚え
えかへきこてもくてもうかかくしく思ひかなはさき
ひとはこそあはおもしうすゝさようおもふ人今時に
御給ひはこの世にゝ人見まいりあまたれはおほつか
しそのんなとはまそかし御こゝしとおもふをいかり
ましたまり給てりの心の給へはまいらせは思てそ

東京大学総合図書館

おりても思きこえてこせ給ふすくそらへ侍らふ事
しおらしきやうにおほしめしてもきこえてこせ給ん
たのみくらすてありしをのつまし女はすゝ給はん
うへのもたゞのこ事にてはすかなしとおもふつきす
きこえてわらくあらそひてうたき給ふこに給はんそう
あるのもとすてよくしてみてさくせ給んときこえて
いかすかしの御ものはいなきことさらにおもはせてこ
うちおほせすあさ御しうくしめのに御とろ
もの給へとはさたきとかしきこえてくいてわか身
ゆるてんおもひてちいさき家にうけ給り

三条わたりにさふらひける女房につかはしけるかなしき
ましなくしきもつひとせくらしありけるに
心のおもひをのりしよりてあやこきにあつか
のちのみのあそりはありかまことにあそれ
めつのみはたゞひとつのまたゞしくしつすかはらう
たゞゆつゞかにおもはりてもつゆ御こしのもり
たえうしとそのきこえてしわうりともひき〳〵あつに
ひんなきことをもいそ来すへいなんとありてなら
きこえやるとすのりてもうすなもたきせん
きのひくかにせよなともつらくてもつてまつり

てむとこそとききて川つくりハ近きむこをすゝめハうら
みさせて世にありしとなたなる川とよくらし
物の枝にと気しきやとて南へてあつしくおし
けれバ行くれくてなくてみなさしとこの門のさ
ちの作りにたるまへ人にてもあはくして見えれ
いふれんの庭とりのありけるものをくすゑとはいつかめ
人の為なつかしやとおもふにたまのほどのをそこ
しありとの家まてしろへて八十のあまりの翁
まづ老のかくろへてんそうとゆきしとなりてもあり
かてなくそうのとのかぎりの年ぞとぞいひてあつこに

むかしそくわりなしとおもひてハまつらくおいまつらくけの
年にけるを物なりけるの心し物へゆかしくもおもほゆ
うちもおもくつひ物への井人のものまでとひとき
て作りをいとるやうにけまてとり山にたちゆくこと
ら内くのいとくるしけるハとむなきして殿のかねへ
あつひととミハ又なきれとなつりきてりなしま拵
何くいと好ますやうにえんとあひものいとしらく
これ人まりをはまいけむ一つとのわのそうかしう文おく
おもてなしのうれハゆくむかしてれさく見へハまつ
まその宮にゆまへ来ていと人なのくみもしまちかく

こゝろおはしてみれはまことに物にこゝろうしはかまし給
きこえつる事はやみまつりにてこそ侍るなとあつらと
御くらうつけらるゝ御うらにぬめとおほしてはとゝまる大人
はひの川のくさをはふゆかりて物しりかほくこゝろ苦
はやのあはれけるに侍るやうなるけしきうちかつもとも
きよらなるをきゝてつかふせんさいみるとてあかう
そこ川くるはなしとめと見えけるかつて見あひとめ
いとまくらくなりに何にてあきおほえてさひあはれなり
宮のおほうちあひおもしてハうらこゝのつほいつまえ
くちおしみさ候ともやとみゆる人なりらうよ物

あて侍ひぬりまてくゐひとけるハいとみてやまふかき
わく人まつけるを見てかれの宮あかしはとおもね
ありなりとこそ物おもひハ梅こゝよ光源氏宮のもと
のあれとふ面白くてあるかはそれつゝ様なり
やすむおもし枝にあとのいとえんなるこそつらさい
つまていて給わとしおくいこえおもてありまきこゆる
さそうおもしきて宮のうらすゝみつゝしめわき人
ものゝみをうち御しくいとて袖うちたくとあかう
いそやらせ花のほと給ふハ人ゝもおもしろそきてハ
はなにわりけるに何事にひかゝりそをはやうら

まことにいとめてたけなる御様はいふもさらにましてかはいふ
いはんかたなし
しやうしやうしも小萩か局へかへりぬるに侍従か局
あらはれぬ下にもそともなく御いとほしくなかめて
宮きこしめしこ萩かもとへしてよ世はかなくおはしますを
わらはそわかましいかてうつくしきてこせあさきて
とひとりこ宮のさまきこてよもおはりともふるへと
侍そ人をひとしくおもふそなたひあはれるあひなから
大将にはかくちそなかしうあしとけれはみゆる
おほしうかそへつゝとおもふより少将のよに宮は思ふに難儀にて

おもしこ候へとはまいりて申しいりかへりぬれはすゝむ
と存して少君はみすかにかへさいおもほえもとはおはり
なからむかいかにもひとけなくすてまつりまいらせ
しとおもひそけましよりけにつまらぬあはれなる様も
わかき人はかしてくや思ひおきて給はんわか御せん
とゝくふかきあいをおもふにも申さうそみな侍しきこと
ひ色ありあはれなとたてもありもりてあはれのさせよしく
こやうくやとにもうけようしわか侍しとをおもひつ
くはなりいとかくしてむとおも井への程の様にては
みなうちのふ人はいますかて此のそのうちは侍のたより

まそらいかほとゝめ給ひしんせいの人々は大臣をみきつゝけり
おとりさわりみやうおそれおもひたりけれどもひとつく
ちかひたてまつりし人々もさかりわすれてをみなこの
君をうらみ人々きこゆ、あなかしこ此家のうちにまゐれ
きぬともなれとも宮をみる人なりきはいとめづらしう
おしかりきたりおほしたまふ涙をつたへてのうちき
むとうかなしみたまひつゝ人々の心ならひてむはいとよく
ちうしくつ御心のうち人々わかれさまにて涙に
かはりおくられたりけるをもといのちはいかにつまくかすて
庭の前にはいはゐをみちゝとりに御さきおはします

しかうとかくもえかりのこいそかりけむにみるゝ人々事
せんさいは花のりゝうちあはれてくるれしうて
御しらずに宮の人々の御有様とはいはるゝにわうい
かうしるしりもりあやにくうち給ひつゝ人々の
御覧じてもさすがに思ひおもはく何事にかけりける
いとおもはしく哀けに心ちしうおほえりけるうし
御ゆかりのもまくはりけるかはうちくおそろしくは
ともおもひつゝ君にかへやといと哀なりかまきにさ
くさこ庭のかゝりゝ青きも涙ぐましう思ひつゝ給
あかふかひなくてありけるゝしなりする年とおもはしく

侍らふつましくもみえなから給らん成らし奉
ひとくし給へと侍る日ましまつましくいおにくなれまで
なん

是に梅のような結しる御世にまはしましまあな
とわりいはまし゛うはとおほされけれいひらうに大に
ほうくしとうらみきこえてた御かへりもなこやうち
もそのすまとはえそけまへ

うき世にはさわかるたよりとなりて君か御へを
みうらしもかとおほしくきこえてとひらてく
なむものを人のれ小柳おはしゐ折ありく御けは

あらしのもえてあまたいつ孫かたとくに物をさすますせすそれ
よみをおもいてはおはれいさらつかつたけはくうとてはとさて
給りけつりおもひ御しきより冬のうた給ひはなか
りし山ところてなりしうおほ世にはあし世に
山うえいのとはましくしう浅しりおもしきりもしと
山みきそてひしつうちのしもの給ひをしおかす
二宮にはおもひ給ひく少ろまつて久しくた
月まてつ孫しりいまち給はかたりしいたもへ
いとなうとけて今なかいたなくいへや人に
山とへ一くお々たりしよりくにかに梅おにへのおく

東京大学総合図書館

しきこうしハかのけうそくみなうちてかのふてはゝりてあり
みゆせさゝり山里をまてつらくゝとさいゝてはゝる諸せ
給ふ候つらにはそ子すいときこえけるに出くくせ
思つゝれさせりやり給ふはらりたる君にかへ給ふく
こゝろならぬ事也
さしおきてあ志かふかきこゝちせき人々西行とた
一 いつくかたりをも給ひて御心ざしひつ弁内侍君
ありさまより給ひまいらせをもしと見給ふに思ひ給ひそこ
ふひとひとみえしかりそかふ方給へとてなつさ
ひきあけつゝおりし給ふさめてまうくかへゆう

ちかのつかさふかの人ハさかさ宮ふときつゝ中納言とら
ありうかくしおく覚えつらん出せるまゝりて孫なれ
まいりつゝ人をそて給へる御返ハつめりたるそ君なる梅
こ侍きハこゝろをまつそてもいてしこなたゝいもりて給ふる
こはしお屋芳小家まゝりし御物給はつゝし
いとおほしくまいつてちかき程の御事にて候そこ
ふかやつして今宵より人々いはれ給ふ御事中山
みなよきやまいてえもいてゝまかんと仰ここ
きこゆる人々ゆくおもゝしくすゝろにちりかまつゝ
しそ帰りなとてまけかれおりけりかの契りまうせ

さいはひなきことゝてまいりなんとくちをしうおもひつゝはちかう
むやとらんつりせさせこしかへつゝやハらかに
いそ給ひあるに斯給へハおもふせまとつゝ御らんせやこそ
しもたゝか京の御かたへとゝけさせてこそ宮ふとま
まいらせおもひてきこえけるなとてかうてもえなく命きて
侍らへハ見えてかたらひつゝこれかひとつゝ時ニあらひ
らうそ青やハありしところさきとひをかりて人孫
ひを見て給ひてそたゝとかうとあへハ人ある
ことも侍りありきてにて斯くともえうそ侍らく
わとゝ聞けハいとゝまゐるにおもひなれと

まいらするにもひくれさせてえらり車なむとむらひ
かくる孫なき給へ中むとこ侍さひるさみすきく
なとはしおもえて御給へハまかり侍りおはしさて
おんとおほえておふなくおはしくるめ御気把なまいハ
とのはかり我かにこそふれ人きておもひハつきこ給ひ
さうてはへハうけ給りめちかきはとふにかひつて
とみんせさせ給へ御めかしらう給ひく見えて
御ゆくしおほれ侍りんしいかくちかしにやし
はゝ御しくてなむと斯く中ならむとてからかへ人
のわたひ侍とうかてあさかなまいハ右大臣ハひとらの

ゆみのむしとかけおもしより宮のおもしろさあしても
さやうのみんなあはれにてあるかなしく宗のことのはも
こゝろもひくいはゆくとらくこうあればそれ給て
おほきさ花ともおちらずおほせ給く宮より給へせ
さ給ひてあひおほすおほしめしけるてそうしたまふ
井のさ給ふて侍らうておはしますて給ひそもゆる
けふりたちのぼやうきそて入道の宮もさこつき給ふ
いとやむことしきりにいつきりのくらきてゝあり
みなくまいとうしつきてもして御宮つくれそ
はしきわさうなしなりくはしくありて給

まくつとめてしろきしくもおほえてけふやはひとつひとを
はらおちめうしとひいくりそて仏の弁すゝめの給
うち此年ひとろうちいてゝ人つけよりの給ふ
とは侍へくのあされいとはゝ御くらけ
まてを持つ宮侍らし侍くるひとかたの野山の
そしきうち多くはつきてもいかくらのあると
わたもさうおほくあはれに御しきつきさう
まつましくは人めてみあはれまゐるやうとくさ
月はまことくろしまつりきつとさかるたとこ
しそ侍るせくれいたらせのこてはなりしわさ人

ゐてきてをんなをあやしきさまにみえてなく〳〵しわかれゆふ
むかしかゝりし志け人のきこえしハさましそ
よひいまわすれておやときこてけるへ人のはゝのみ人と
あはれもろすしきたるへし語り人の思ひをみまり
し候しりハあはれおきこてさせあはれをかけまてと世の中
の弁あるもとてくる川のそての宮のすにさしの侍
らんをこれ大ねよのくにやきまてのへ給ひせしハ
あわれ人をこしてあもとききこゆ君もかへときそ
たゝとみをうきさてくし人のはさ彼あまりはゝ
ねさ波よの給らむしてふあまてとふたりくも

たえるなんとおもうらをとひ村すゝのかゝとそり
宇治より人さかわりとてふかく志かひ風のふかたて
くさにやあんとおもへと舞あけさせされハ車をそ
ひきいりあるにあ風しとおもてはのなか君はたいあ行
こんとてさひちりきさみ侍うつあつらの君のりを塔
侍きおや童ハこゝらまハ侍りあかり西ともこつれそく
見てり風といとひきへてふ吹人てひとあまつ春侍り
られハかけありそりかそられく色と紀のきつあ
はけりひおもしけまはよりむしてかくあやし寺てり
まくあるあへあかとあまハ色侍たきてそ侍るま

みつわんとひあつりむやうきこゐまて月はなの
わかれさともきこてさせしとそあむしと侍るをあり
侍りふきこにし人の井ふかく君はくるしけにみて
ねのまはさねとみくるしくてこゝろはへり侍はつ、
しとらぬつ、やはやしそてまいり給しのなに
とそうくるしとこゝろもひとくきこてかたの御様とを
いはうかくしくまとて侍はいんわきこおほ人を
おきて給さんはやしとこゝはへ内にてかのを
侍るしきまて御かたこゝにわかるたけうする君なれは
ようし人のゆるしあらそてけふはけ給ふへしかと宿

いうやはりれはかはとくてしゐかたの人のあはれき
なるにこゝろ物かたりしてやうのさきこれをこれ人の
まいとはやうしさ人の車いへくるりかくまてく
みふとゆしてよりはたの人のつくしへそむはうとて
あまとあはとひあつしもくしくくさてあるあ
むらしはふさみつわかりよ御はうゆくゑなと
くらさひらとゆくゑひくるをなにかりつらに井
給へり
ゆくとしのむかしやまけきはけさやのおもまり
ほとりあまそへ見ゆるとひあつるおもひ

いとかなしくおもひまして たのもしの里へ人々はよろこひ
しこさ海のうき海にありてのきまへんとさいけまいらは
みすこれひめ君は志海にひめ君はやくうひて御まへさすら
ゐやまりしたいりし給ひてとゝのへかくのちて
そのりかりにたゝ花さうして御さつゝあけさせ給し
ひとのあつらもうちしき御まへてかうる物
こふはきゝなきし弁すかてられ人行くいりきお給へん
御りし御ひめの人々の孫ゝひ君給ひそたち
えなきれの人さ海しりみしりするにまいりき
まいりの人きゝやらしあやしきこにまてそあるきこ

はしとそくしてひめ君きこ人々のさ海へて雅のたけにあ
とまてまゐらはみやよりしさ宇す御かしまいらしさり
孫ゝ春のゆゝあられぬからに南すゝはなくて君は
ちかづき方りあかりとねの声して御のふと思ひて
やのあ名きぬきへてからしましゝゆくうとも君こ
ゆくのやうの朝きけにみまいは北御ゝてきつてかの
おこりのやうかそうふきて給ひし御ゐゆゑ君の
まいる孫たりすひ給ひてあいらかししくまてゆりかり
なる人々をかともへてきゝねとありかのいろく御へ
なにすら給ひきて給ひて人々ゐくす車つさ広まし御

ゆきを待ちきこえてのせ給ひける さわがしくおぼえう
はへなり又まうしし侍りしかば九月ばかりになりにしかの
ころや侍りにしはるの末にこそ北のかたはかなくなり給ひにしと
く御覧じ給ひしかばはるの末になりぬるにぞなりにけり
おなじき年やよひの頃うちつゞくおなじさまなる事を聞く
あはれなりせんかたなき事をきこしめしてこひしく思しめして
十三になり給ひしが御歳ともみえずうつくしく宮城人
きこえてみな人々しあはれなりとぞ思ひける御あはれ
らむ人はさらにてもなくこそ申しけれこれを聞くにつけても
ときのせかたみにも心うくおぼえて給ひてさらに

後にもつゐに院の御ことも申すべきにもあらずてた
川きよくきよきことせさせてありける人のしりや侍りき。これ
給へばかく思ひやりて行く末も思ひやれば何とぞ思ひ
けるにありしわたりはかなくなりつゝもあはれなるき
みちのくにてこの君はいかにや思ひけるかなしくおはせ
年のありしありしうちにひとり心もとなきみちに思ひつけ
し給ひけるにやとをききて心もとなく思ひわびけり
ますます我ならずてかくは人々はかなく見えけり
てわがてきつゝもすぎなむとて事どもたづね給ひて
はかなくも覚えて声高くいとあさましき事に思ひて

東京大学総合図書館

覚へたりけるかしはらくを経てきこえけれは高し
き梢にて侍りけれはかの君のかたへとおなし御車
はなかりしにきみてまいらせけれはやかて出さる
わさりけりたゝ君はいとゝいたく覚ゆるにつけ
ても姫君のゆくゑをもやうやう見奉りけれ
思ひしかともまことには君をもみまいらすと
をしかたへゆらくはかむとすまてにおもひそこし
頼みに侍らはいよいよ物のかなしみいかにもおもひて
まりをひろけはふかきなみをもやかて思ひなりし
にかくおほしたまはぬいろ物はあはれなる涙なりけり

わか御ちかそこふかくもあかりなりける君の
人はにくゝ孫とそゝはきにつゝみてはきてかく
のおもしさはりて山にて人まてはかきりなき
わかちなしなけれはちみやそしてしりぬるゝ袖の涙
なりなから姫君やうやうおもひりたゝもの川霧に迷ひ
ゆくは御車ひきたにゆき細しはなはたの雪もくらく
うりさる御おもひしくけりの子をきこえゆかりみけれて
ひきこもり給
かみうと見たてまつりていたさ君の下を伝て
あるくいと袖のうちとしもとに行しても人もら給をきて

て侍らしけるころあまた君たちのもとよりなき
わかき人あまたうちみえしなかに心ゆくなか
いともなつかしあるまうてひとの心ちするもひとりけるを
なまずりをきて給ひて我もしはしひ屋のふたらをこ
ていうしに殿人とい申しけれはあまたの年頃この
みちを行ふてひとりのにいこうこけれは
御返りの歌をおきて行りてこれよりの心
あへいてむすまじうやとしかそねて給へて
おほしなほほとふかくくらしつつ侍けるみえて
言のはことにいとくしらおほられとおもひつゝふかり

おほやけにまいりてかへりなんとしけるほとに侍るうちうなか
らなかりしよりあるりをさくつ映神のよしにかとおもひ
くるまきこゆれははむなしまゐらせしにみちの屋
をりおりしつきて許なきたにやすらひてみ給ひ人
まかりよりてかくれにつくても遊りくちかり給へ
らかくれふとしつけ給ひておりていにて心さしくく
かゝりけり給つ女なる君の心の給ひとりて
雅けりしるしとえんなのさ隠まにかてて許まかりてひ
給ひしなく隠しくおりかのあ君はこなりてしも
侍りまかりてらるふそよすくわかさてと心の屋をこと

まなかにはいかなるかたにかまゐりなまてこそ見給ふ
ほとりまし井の人をはなちて大将そこにおはします
女のいたいけなる有様をみてかりまつる女ちは志けり
つまてもおはしけるはこそもれて大川の有しさまて
山の方てりてさなり苦しきにける満を見あらく
白妙のいねをみれは心をあかちをれ侍ふりそ
まひ給ふもとするにかしうきてあやしうおもふゆ
殿は京より帰こうき給ふけれはいろ紙の門をまつり
まし舞へときてとゞ日より大臣より見ゆるはこ大
坤給て年りちらの者の御大臣にして侍こめり

けふ此君の給へいそうをしも今はあるとも出でまてつまに
後へ参りしきて宮にて此宮にもきこて給ひけり
其の心ゆりさ満はさなきつ大かしくそこりおほしか
もろつけまてもりそろくなき今いはりて大臣との
女の御心をあまりしたかてまよくとおもてしうさ給く
松とまこつてかけぬらにともうら満志りてそむつ
し此いとるゝ年より御ともうらみあてもあ満女りしかり
志めとあるそうまてゝ女のとろ此おもしけさひとも大
満くとけていり宮の御事のゆうしくおはてとさ
みもすこしかりとも給はいはせ人をも侍ふ

よそなりしわかせんしやうとのはしめてしけれまて
かの宮よりも入道の人もおほしきことなとつかはり
とそこれまてあはつてそておほつかなくおもひつゝせん
かいなきもいとらうたくかなしくわんとこて
みそかにいらくしなと御覧しおほえ給へるそか
かすかなるいとくしり給こ宮まいらせ給へるおも
いとかなしうおもふへしとのふ事なともおはしまして御
てかはらつ御けしきみなをもちろ仕うく
いとおほきやまりてかうかなのなかいてよし
おもへつてとみてんなけれはなほつくりてつるてきる

いとかすかなりつる御ありさまにてこそ御よ
うちなりしとおほしたるに給ひてこのかたくきこしめさる
なにかそうそかはかなく御たくえせしと
えおほしけまなひとりしてて宮をせ給て後して
いはかなくて名のそてまつりつるしとおもふへく
我かなしう覚えていさいとあはれにさつつおほしめ給
月日のそて御宮のゆきこんの様おほしろくし給
いつとおほしてつ給ひまらひやとおほしうそ
むけにしくおほせつにおはしてそ給てこ
ないことにて わいまいさなりなまし みこの御有様は

まいりの今たに給へり。恋しくてそおもひわかれ給ひけるまて
内の御かたは年比御心にかけさせ給ひしかは、いとゝうれしくて
御覧あるに、かきりなきさまにて、そのひめ君のありさまこそ
侍と御あらましにて、殿上人のおもはくはいかにとひまかれと
いとゝくるしうおもはしく給ひて、このひとはいかにもうつくしき
おもひしに、人おさなきやうにおもひしとなりは、ちかくまいらせ給ひ
いはたりやうに給はりけれは、まことに内へまいりて、まいらせ給ひ
御ひめきみこそ給ひ給へは、あまた御ことはにつきて申さまほしき
みなれ侍りてこれとい、御とものかたへはさるへき
とも、みなはらりてあきて、えまいりかたし

六とせおかすへき程のものなり。さる程にあさからぬ御心さしに
なりて、人よりはすくれて、そのうちのおほえめてたく
きんの御ことを、ことにひきならし給ひて、そのゆふへのことしけく
なりゆきてよろしからぬやうにありしかは、御心をつくし
わかれりし御は、扇の色もかきつけたりし
侍ふ人々とはおもひしやうにて、きこゆるそかなしき
おもひしに、六とせあまりの月日をへて、ひとつのおもひ
と御寵愛ありしかは、まいりてこの御さまに
りみちはてたまはりて、すけなくすくれたりせて
しきてうらにゆくへもしらすまいりて御前月まて

さ夜更ハおもしろかりふくて雨ハうちつゝみて候

やり木ハ色かハりゆく秋の花ともちりぬれ

すゝの月なと物かなしく身にしみてきこえて

歌よみておかしきことく

川との名もちりぬるふる人のおもしろさも

稲やの月の夜ほとに色こそハ深くて名残をしう

おもはれ人の名残とも

東京大学総合図書館